

法然上人靈跡黒谷青龍寺について

山 本 博 子

比叡山黒谷の青龍寺は、天台宗であり比叡山五別所の一つ

であるが、法然が長くここに隠棲したことから、法然の靈跡とされている。江戸時代刊行の『円光大師二十五箇所案内記』には番外第一の靈場としてあげられ、大正年間には境内の報恩蔵が二十五靈場の第二十番に指定されたが、その後昭和年間の靈場改正により再び番外靈場となり、現在は特別靈場と称されている。この青龍寺について、草創・境内の建造物・堂内諸仏・その他の遺物等について考察してゆきたい。

青龍寺の開基は、慈恵大師良源といわれている。このことは、『巡礼所作次第』（慶長二年書写）や『西塔堂舎並各坊世譜』に記されているが草創の時期は定かでない。史料上では、弘安四年の『叡山巡礼記草』によって、当時、黒谷に何らかの建物があり隠遁者の住む所であったことがわかる。

又、青龍寺の名称の史料上の初見は『巡礼所作次第』であるので、慶長頃にはすでに青龍寺の名称をもつ寺院が存在した

ことは明らかである。

青龍寺の位置する地名が黒谷であるところから文献には、「黒谷青龍寺」「黒谷」と表現されている。この地名の由来は、大黒天を安置したことから「大黒谷」と呼ばれていたのが後に「黒谷」と称されたものと伝えられている。法然が金戒光明寺を開くに及び、青龍寺を「黒谷」「元（本）黒谷」、金戒光明寺を「新黒谷」と称するようになる。これらの呼称については、『京羽二重』『京城勝覧』『近江国輿地志略』等に記されている。又、青龍寺は、西塔北谷に位置しているが、『円光大師行状画図翼賛』（以下『翼賛』と略す）によると、いつの時にか現在の場所に移されたと記されている。

ここで青龍寺を描いた絵図についてふれておきたい。織田信長による元龜二年の焼打以前の比叡山の様子を描いたとみられる古絵図があり、この内三種類の絵図に青龍寺が描かれている。①比叡山三塔図屏風（江戸期写、滋賀院蔵）。②比叡山絵図（文化二年真超写、南溪蔵）。③比叡山古地図（明治四十

三年上杉文秀写）。これら三種類の絵図の原図は同じもので、原図の成立年代は、明応四年から元龜二年までであること、武覚超氏がその著書において述べておられる。⁽¹⁾この原図が青龍寺を描いた絵図の最も古いものといえる。焼打後の青龍寺を示した絵図は、名所旧跡案内等にもみられ、『京雀跡追』『京城勝覽』『名所手引京図鑑綱目』『都名所図会』『改正京町御絵図細見大成洛中洛外町々小名』等にもみられる。尚、今掲げた絵図上の表記は、「黒谷」「元本」「黒谷」となっており「青龍寺」の名称では表わされていない。

青龍寺の名称については、『円光大師御遺跡四十八所口称一行巡拝記』（以下『巡拝記』と略す）によると、昔は正龍寺と称していたところが、青龍が出現したために文字を改めたことと記されているので、当時、そのように伝えられていたことがわかる。

境内の建造物は、『比叡山堂舎僧坊記』（正保本）によると、当時、本堂・鐘樓が存在し、文殊堂・大黒堂は旧跡として記録されている。又、『西塔堂舎並各坊世譜』によって、本堂・鐘樓・経蔵・方丈・庫裏の存在が知られる。これらの他に、法然の墓があったことが『山門名所旧跡記』にみられる。

建造物の再建・修復については『西塔堂舎並各坊世譜』に記されている。それによると、本堂は、慶長十八年に再建、寛永十七年に修復、元禄元年に改造されている。鐘樓は、寛

永十二年に建てられていたが、鐘がなかったので新たに鑄造して鐘樓も建てた様子である。その後、寛文七年・元禄九年にそれぞれ改造されている。鐘はその銘によると、寛永十二年に初鑄の後、文化年間、文政四年にそれぞれ改鑄されている。経蔵は、報恩蔵と称するものが存在したことは『翼賛』にみえるが、『円光大師御遺跡廿五箇所案内記』（以下『案内記』と略す）や『円光大師御伝随聞記』によって、その当時すでに焼失していたことがわかる。ともかく、宝永二年には新たに経蔵を建立している。方丈・庫裏等については省略したい。

次に堂内の諸仏の変遷をみるが、織田信長の焼打以前は確認不可能であるので、それ以降の史料のみでゆきたい。『巡礼所作次第』『比叡山堂舎僧坊記』『北嶺回峰次第』『天台座主記』（貞享四年の条）『近江国輿地志略』『案内記』『山門堂舎由緒記』『都名所図会』『巡拝記』『御山の枝をり』によると、省略の可能性が考えられるものの、当初は、本尊が十一面観音像であったのが、貞享四年頃には阿弥陀如来に変わり、この頃から法然像の安置がみられることがわかる。因に現在は、本尊阿弥陀仏像、維摩居士像、良源・叡空・法然上人像が安置されている。

次に各種の銘についてふれたい。経蔵の裏に一基の灯籠がある。寛永四年九月の銘がみられるので、宝永二年に建立さ

れた経蔵ではなく、それ以前に存在した経蔵のために建てられた灯籠であることがわかる。天満宮前の灯籠には、(左)元禄十六年(右)宝永三年の銘がみられる。本堂前の水鉢には、元禄十年四月の銘、本堂前香爐には、文化八年の銘がみられる。法然の六百回遠忌が文化八年であるので、香爐は、遠忌記念に作られたものと思われる。門前の灯籠には、(左)宝永四年八月、(右)享保五年七月の銘がみられる。寺内の名号石には明治四十五年五月の銘がみられる。明治四十四年が法然の七百回遠忌の年にあたるので、これを記念して建てられたものと思われる。

標石については、門前に明治三十七年十月知恩院の尼講によって建てられたものがある。『案内記』(明和三年)には「円光大師御旧跡」と記された古い標石が存在したことが記されているが、それが破損していたか或いはなくなっていたために、明治三十七年に改めて建てたものと思われる。

青龍寺を示す道標の類については、まず旧道の入口にあたる西塔の仏足石前のものがあげられる。これは、法然上人二十番霊場と記されているので大正年間に建てられたものである。ドライブウェイに面しては、浄土宗開宗八百年を記念して昭和四十七年に建てられた道標がある。又、青龍寺門前の階段手前には宝永四年五月建立のものがある。黒谷道(走出道、八瀬道)と呼ばれる道があるが、八瀬の登山口に、明治

三十七年に知恩院尼講により建てられた道標がみられる。この道を三百メートル程登ったところに横長の道標があり、比叡山内各堂舎が記されているが、黒谷のみ「十二丁」と道のりが記されている。

青龍寺の法然上人御影に関する略縁起が、青龍寺から刊行されている。これは内閣文庫所蔵のもので、外題は『黒谷円光大師略縁起』(内題『比叡山黒谷円光東漸大師鏡御影略縁起』)で刊記は見られない。この縁起の大部分は、『法然上人行状画図』の記述に類似しているが、一部分『翼賛』に類似した記述がみられるので、縁起作成にあたっては、『翼賛』を参考にしたものと思われる。従ってこの縁起の成立年代は、東漸大師号加誡の宝永八年以降と考えられる。

法然の霊場めぐりは、宝暦年間頃に始められた様子であるが、青龍寺は、大正から昭和の初めの期間以外は常に番外寺院であった。しかし法然の修行の地ということもあり、巡拝も多かったようで、標石や道標が作られ、また縁起の刊行も行なわれるに至ったと察する。

1 「焼き打ち前の比叡山古絵図の諸本について」(『叡山学院研究紀要』一四)。

〈キーワード〉 法然、黒谷青龍寺、霊跡巡拝

(佛敎大学図書館員)